

引喩と暗喩 (三)

——源氏物語における白氏文集、「李夫人」など

一 李夫人—夕霧

「李夫人」は白氏文集(卷四)におさめられる著名な詩である。とくに源氏物語にとって重要な詩であり、そのことをもつても、人々によく知られた。

この重要だというのは、源氏物語が八か所にもわたって引用し、かつその引用がまことに意図的に卷末、「夕霧」以後に用いられることをさしている。

のみならず、この引用は源氏物語巻頭に、これまた大量に引用される「長恨歌」と好一对をなす。その上に、「李夫人」と「長恨歌」とがきわめて近い内容をもつことを考え合わせると、源語作者における「李夫人」は、看過しがたい重みをもつといふべきだろう。

「李夫人」は諷諭詩だから「嬖惑に鑑みるなり」という傍題がある。

天子が女性たちを寵愛することを思い起こして、女色に迷うことを戒めようという諷諭である。

源氏物語は、こうした女色の戒めを卷末におびただしくちりばめたのだった。しかもそれが、書き出しにおける「長恨歌」——同じく天子の女色を扱いながら、これを「感傷」する詩をちりばめておいたのに対応するのであれば、まずは事柄を愛憐の悲しみにおいて後、一大長編をもって人生の絵模様を描きつづつた上で、その愛憐がいかに空しく嬖惑として鑑みられなければならないかを語ったのが、源氏物語だったこととなる。しかもこの構成は、ひとり「李夫人」のみならず、他の引用を検討することによっても明らかである(拙稿「源氏物語の結語」『中国古典鑑賞講座・白居易』)。

さて、そこで具体的な引用の仕方を見たい。まず「夕霧」の巻に見えるものは、次のごとくである。

中 西 進

単衣の御衣を御髪籠めひきくくみて、たけきこととは音を泣き
たまふさまの、心深くいとほしければ、「いとうたて。いかな
ればいとかう思すらむ。いみじう思ふ人も、かばかりになりぬ
れば、おのづからゆるぶ気色もあるを、岩木よりけになびきが
たきは、契り遠うて、憎しなど思ふやうあなるを、さや思すら
む」と思ひよるに、

この「岩木よりけになびきがたきは」が古来白詩の引用とされて
きた。「河海抄」がここに「李夫人」を引き、不動の心だといつた
のを始めとして、大系本補注、丸山氏（二〇五ページ）、古典全集頭
注が「李夫人」をあげる。

白詩「李夫人」は三五行にわたる詩で、漢武帝が李夫人を死後も
忘れられず、絵にかかせたり反魂香を作らせたりしたので夫人の魂
はやって来はしたが、しかし定かではなく、一層武帝が苦しんだと
いい、同様の例として周の穆王の盛姫、唐の玄宗の楊貴妃をあげて、
このように美人は人を惑わせるとし、

人非木石皆有情

不如不遇傾城色

と閉じる。右の前行が引用されると従来考えてきたのである。

もちろんよく知られるように、人間の身が木や石とは違って感情
があるというのは、中国において伝統的な表現である。何も白楽天
が初めて用いたのではない。それなりに吟味されなければならぬ

だろう。現に、ここに引用を指摘しない水野氏（二三四ページ）、古
沢氏（六ページ）、小守氏（七八ページ）の考えもある。原詩は「木
石」であり、源語は「岩木」という点にも相違がある。

しかし、右にふれたように「李夫人」の引用は多く、その検討は
以下に行なうわけだが、全体の傾向として源氏物語から「李夫人」
の影を消し去ることはできない。

のみならず、「蜻蛉」の巻では後述のように薫が「人木石にあら
ざればみな情あり」と口吟しており、同じ句が引用を明らかにして
登場する。今の場合もこれと並べて考えることができるであろうか。
「岩木」は「万葉集」（巻五、八〇〇）にも「岩木より 生り出し人
か」とあり、この方が日本人にとっていいなれた表現だったと思わ
れる。

そこで「夕霧」をもう少し読んでみよう。右にあげた件りは、夕
霧が柏木未亡人、落葉の宮に熱心に求愛する場面で、夕霧は以前か
らも落葉の宮の許に足しげく通い、宮に愛を打ち明けているのだが、
宮は今まで首を横に振って来た。それを夕霧は「うたて。いかなれ
ばいとかう思すらむ」というのである。

そして、もうこうなってしまうたらどんなに心の固い人でも自然
に気持がとけるものなのに、宮が「岩木よりもさらに靡きたい」
と嘆く。

そこで私の目をひくのは、岩木よりも非情なことに「契り遠う

て」つまり前世の因縁が薄くて男を憎らしいと思うことがあるという一般を持ち出して、これを納得しようとしていることだ。落葉の宮の拒否は前世に理由があるという。

もとよりここでの因縁とは、夕霧と落葉との因縁をいうのだが、広く落葉の宿命をふりかえってみると、いかにも落葉の宿命はつたない。そもそもが、夫柏木から与えられた、落葉という比喩がびつたりの生涯である。

母は下腐の更衣である。それが朱雀帝に愛されるという僥倖をえたばかりに、すべてが狂ってくる。だからこれは天子の寵愛にまつわる話題であって、華やかな寵愛の一隅の風景として、華やかさの蔭に泣く女がいることにまで目を及ぼし、その生涯を、しかも子の身上話として語ったものが「落葉の官物語」だったと考えてよいだろう。「落葉の官物語」全体が、因縁話なのである。

夫は出身の悪さのゆえに妻を軽蔑し、妻の妹に恋する。女は音楽によって心を慰めるしかない。

しかも夫の愛人には夫がいる。密通が露われ、夫は悶死をとげる。それに先立って二人は離別、そのまま夫の死を迎える。まるで近代小説にそのまま当てはまりそうなこの筋書きを落葉は辿る。

また未亡人となった女のもとに二人の男性が登場する。一人は夫の友人、後事を託された男であり、もう一人は夫の弟である。これまた世の通常だろうが、やがて母の死を迎え、心は仏道に傾く。そ

してついに夕霧と結ばれるが子はない。夕霧には妻がいるからここにもトラブルがある。

それにしてもやつと安住の場所をえたかというところ、やはり夕霧の心の中にも女の出自のよしあしを意識する気持があることを知らされ、愕然とする。夕霧から、

我は、まして、人もゆるさぬものを、拾ひたりしや

といわれ、

宮は、げにと思すに、恥づかしくて御答へもえしたまはず。

(宿木)

というのが、落葉の最後の姿である。まさに彼女は下腐の女からの「落葉」でありつづけた。拾ってくれた夕霧の中にも、前世の因縁が忘れられていなかったのである。

だから、生涯に、母は終始行をともししている。夫が去った後も二人は身をよせ合せて生き、母は娘の恋を憂えつつ死に、娘は悲嘆にくれる。すべてが母の出身という因縁にあやつられた生涯として、われわれは現世をこえた世界で、落葉物語を読むこととなる。

そこで「李夫人」に目を転ずると、ここに描かれるものは死者たる李夫人であり、生前の愛からみちびかれる因縁の呪縛の中で、武帝は夫人を現世にとり戻すべく絵をかかせたり反魂香を作らせる。すなわち、

死後留得生前恩 君恩不尽念未已

と生前によって決定された死後の愛の中で、帝は夫人を愛し、
反魂香降夫人魂 夫人魂在何許

と、魂の出会いを期待する。夫人生前の因縁によって、武帝は魂を愛するのである。これは「契り」があまりにも近いといふべきであろう。生前の契りを語る詩が「李夫人」である。

だからこれを結論として端的に述べる。

縦令妍姿艶質化為土 此恨長在無銷期

生亦惑死亦惑 尤物惑人忘不得

人非木石皆有情 不如不遇傾城色

と。一条の御息所がどのような両親から生まれたかは、御息所自身にとつても問題ではないとさえ言えるだろうに、親の因果は子に報いて、娘は落葉としての生涯をすごす。ここには生死をこえた人間関係があろう。御息所の妍姿艶質が土と化しても、落葉の宮の上に、母としての存在が長く消えることはなかった。

もしかして、夕霧の中にも同じ思いがあったかもしれない。夕霧が自分と相性がよいと思っている雲居雁が頭中將（太政大臣）の外腹の子であることからすれば、落葉の宮はいやしくも朱雀帝の皇女だから比較にはならないが、それでも上掲の「宿木」のような科白を口にするからには、宮の出身のことが心のどこかにあったのかもれない。

いずれにせよ、因縁にからむ詩として「李夫人」が読まれる時、

それは源氏物語の中で因縁のゆえに薄幸の生涯をおえた女の物語を、たやすく想起せざるを得ない。「岩木よりけになびきがたき」とは、こうした両者の重ね合せの中から選びとられたことではなかったか。

もし李夫人のように因縁が深ければ死後までも深く契り交すはずなのに、それが木石ではない人間の常なのに、こう木石のようであるのは深い契りがないのだという発想であろう。

白詩によると李夫人ばかりではない。盛姫も楊貴妃もすべてそうなのだから、やはり契り浅いのは人間らしくない、木石だということになる。

逆にいえば愛を因縁によって理解しようとする夕霧にとつて——いや、この場面の作者にとつて「李夫人」は格好の援軍だったのであり、この思想に厚みをもたせるべく用いられたのが「李夫人」だったといえる。

ただここで夕霧の場合は逆で契りが遠いことも看過すべきではあるまい。武帝や穆王、玄宗のようにならないのが夕霧であり、その限りにおいては「嬖惑」は鑑みられていることになる。

その証拠に落葉をめぐって雲居雁の嫉妬がはげしく、いざこざが起りそうになる。幸い雲居雁が家のことに熱心だからトラブルがさけられているとなると、やはり嬖惑に鑑みるという教訓は生きていて、この諷諭を一方の引力としながら、愛の因縁というしがらみを

語ろうとしたのが源氏だったと思われる。

二 李夫人—総角

「総角」は宇治の八の宮が残した娘たちの動静を語る巻だが、とくに中心は大君にあり、大君の死をもつて、ほぼ巻がとじられる。

「李夫人」が引用されたと見られるのは、その中の一節である。

「亡^レせたまひて後、いかで夢にも見たてまつらむと思ふを、さらに見たてまつらね」とて、二^ところながらいみじく泣きたまふ。「このころ明け暮れ思ひ出でたてまつれば、ほのめきもやおはすらむ。いかで、おはすらむ所に尋ね参らむ。罪深げなる身どもにて」と、後の世をさへ思ひやりたまふ。外国^{ひとくに}にありけむ香^かの煙^{けむり}ぞ、いと得まほしく思さるる。

この「外国にありけむ香」というのが「李夫人」の反魂香のことだとする指摘が『河海抄』以下にあり、管見に入るかぎりの注釈書類で、これを引用としないものはない。

「総角」の右の箇所は、大君が八の宮の死後、夢にでも現われてほしいと思うのに全く現われないと中の君とともに嘆き、近ごろは朝晩にしのでいるからちらとでも見えるだろうかと、何とかいる所へいきたいと願うが、罪深い身とて行けるかと、後世にかけて父を思慕するくだりである。そんな中で反魂香の煙がほしいと思う。

「李夫人」は、

九華帳中夜惰々 反魂香降夫人魂

夫人之魂在何許 香烟引到焚香処

とあり、李夫人の魂をよぶべく作つた香によって、夫人の魂が煙にみちびかれ、香を焚く処へ来るといふ。煙が魂をみちびくといふ、「香の煙ぞ、いと得まほしく」というあたり、父宮をよぶべき煙がほしいというのだから、正確である。

引用を認めてもよいであろう。のみならず、引用はさらに先立つ文脈の中に、暗喩として引用されていたとさえ思われる。

そもそもこの巻を「総角」と称することは、八の宮の一周忌に、薫が、

あげまきに長き契りをむすびこめおなじ所によりもあはなむと歌い、大君が、

ぬきもあへずもろき涙のたまのをに長き契りをいかがむすばんと応じた歌に由来するが、この「あげまき」は仏に供える名香を包んだ飾りの総角結びのことで（別に台の飾りともいふ）、香にゆかりの契りを主題とした贈答がこれであった。香の契りといえば、反魂香によって結ばれる再びの出会いを連想するだろう。

契りといえば、さきの「夕霧」に見られたものも契りであった。「李夫人」を契りの中で読もうとする意識は、源語の中に強いといふべきではないか。

といえば、関連することがある。実は右のような父宮思慕は宇治

の娘たちの物語を貫く大主題であり、反魂香もその小道具の一つにすぎないほどだが、この思慕は、八の宮が死の際に述べた、いわゆる遺戒の反芻ともなつて現われる。たとえば、

宮のたまひしさまなど思し出づるに、げに、ながらへば心の外にかくあるまじきことも見るべきわざにこそはと、もの悲しくて、水の音に流れそふ心地したまふ。

(総角)

のように、大君は「宮のたまひしさま」を思い出ししては合点し、身の拙なさを嘆くといったごとくである。「ながらへ」たくないうう気持は父の死によって生じたもので、そのごとくに父の許を恋しているのである。

その、遺戒とはどのような内容なのか。「椎本」で八の宮は、侍女たちに対して、娘に「うしろやすく仕うまつれ」といい、残された者たちの境遇は「何ごと、もとよりかやすく世に聞こえあるまじき際の人」なら「末の衰へも常のことにて、紛れぬべかめり」という。

しかし、いま自分のように皇子として生まれた者の場合は、

かかる際になりぬれば、人は何と思はざらめど、口惜しうてさすらへむ、契りかたじけなく、いとほしきことなむ多かるべき。

という。皇孫としては他人はどう思おうとも、残念なまでに零落するような「契り」は「かたじけなく、いとほしきこと」が多いと考えるのである。皇孫としての血の契約は、恐れ多く大事にすべきこ

とだという信念である。

世に零落することはよくある。しかしそうならず生まれた家の格式に従つて生きていくことが自他ともに好ましいと思う。

生まれたる家のほど、おきてのままにもてなしたらむなむ、聞き耳にも、わが心地にも、過ちなくはおぼゆべき。

その格式とは、生活の豊かさではない。「その心にかなふ」世こそ大事だという。そうではない結婚をさせてはならない。

にぎははしく人数めかむと思ふとも、その心にもかなふまじき世とならば、ゆめゆめ軽々しくよからぬ方にもてなしきこゆな。

この「世」とは男との間をいうのであろうか。こうして結婚が話題の中心になっているのは、三人の娘を残して死ぬ父親としての侍女への当然の依頼のように聞こえるが、やはり全体を蔽っている「契り」から考えると、血筋への顧慮が、いまわの際の最大の関心だったと思われる。「皇族として生まれた身についている前世以来の命運」の中にしか現世をおくことができない思慮が八の宮にあり、それを遺戒として娘たちは生きているのである。この生と死をこえて連なる因縁の認定は、さきの落葉の宮をめぐる語り口と、表裏一体をなすものではないか。「李夫人」が源語の作者によって因縁の詩として読まれていたことに、また思い当らざるをえない。反魂香は、この宿世にたちこめて、死者と生者とを結ぶものであった。

だから、当の引用の箇所にも八の宮の遺戒——「契り」への思い

が登場する。大君はうたたねをする中の君の姿を見やりながら、

親の諫めし言の葉も、かへすがへす思ひ出でられたまひて悲しければ、「罪深かなる底にはよも沈みたまはじ。いづくにもいづくにも、おはすらむ方に迎へたまひてよ。かくいみじくもの思ふ身どもをうち棄てたまひて、夢にだに見えたまはぬよ」と思ひつづけたまふ。

「親の諫めし言の葉」が遺戒をさすことはいうまでもない。それを思い出しつつ、父との邂逅を願う。どこにいるのか、そこへ迎えてほしい、と。しかるに知らぬふりをして夢の中にさえ現われないと嘆く。

そして源氏物語は夕暮の空に吹く風を述べる。

夕暮の空のけしきいとすごくしぐれて、木の下吹き払ふ風の音などに、たとへん方なく、来し方行く先思ひつづけられて、

この風のすごさは魂がやって来るけはいとも思える。そのとおりに「昼寝の君、風のいと荒きにおどろかされて起き上りたまへり」とあり、昼寝からさめた中の君は、

故宮の夢に見えたまへる、いともの思したる気色にて、このわたりにこそほのめきたまひつ

と語る。上に引用した「李夫人」引用の個所は、これにつづく大君の物思いの中である。

この魂がやって来る様子は「李夫人」によると、

既來何苦不須臾 縹渺悠揚還滅去
去何速兮來何遲 是耶非耶兩不知

のごとくである。夕空を吹き荒れる風の中に夢に現われてほのめく魂と、そのさまはよく似ている。しかも大君には見えないほど、ほかのである。

また八の宮は阿闍梨の夢の中にも現われたという。「先つころ夢になむ見えおはしましし」と阿闍梨がいうところによると俗形であり、思い残す一念によって往生がとげられないと語ったという。それをきいた薫は、

宮の夢に見えたまひけむさま思しあはするに、かう心苦しき御ありさまどもを、天翔りてもいかに見たまふらむ、

と思う。文脈は玄執のためになお中有の空にさまようとするのだが、反魂香をたてていえば、

反魂香降夫人魂 夫人之魂在何許

香烟引到焚香処

ということになる。総角の名香が魂をよんだともいえる。

こうして「李夫人」をよぶ反魂香は、いま八の宮をよぶ反魂香として用いられた。そのことによって武帝の思慕とひとしいものが娘たちの父への思慕となり、それも「契り」の中で思慕し思慕されるものとなった。生死をこえるものが因縁であり、因縁を具現して生者と死者とが対面できるようにするものが反魂香だったという「李

夫人」の詩の心を、いま源語の作者が応用したと考えられる。

三 李夫人―宿木

大君はあれほどに父を慕いながらみまかる。その死を見送った薫は、やがて妹の中の君に大君の面影を見出して心ひかれるようになる。

源氏物語の男性たちは例によって女性たちが多く周辺に登場し、薫にも女二の宮との結婚という出来事がおこるが、やはり中心の軸は宇治の女たちの面影の継承にある。中の君の他にも一人登場してくる末娘の浮舟も、大君によく似た女性として設定されている。

宇治の人々は、こうした相似形の円環の中で、故人をしのぶという心情を画布として群像が描き出される。とすると、以上に述べてきたような死者の思慕、その再生への願いは全編を貫いて流れていると思えるだろう。

「李夫人」がこれらの筋に濃厚にかかわることも、いわれあることであった。

「宿木」の一節もその一つである。この巻の巻頭近く、今上帝の女御藤壺がなくなると、残された女二の宮の縁組みが急がれ、女御の一周忌の明けるところに、薫はその降嫁を承諾することとなる。

しかし大君が忘れがたく、薫は一向に婚儀を急がない。「李夫人」の故事はそこに登場する。

昔ありけん香の煙につけてだに、いま一たび見たてまつるものもがな」とのみおぼえて、やむごとなき方さまに、いつしかなど急ぐ心もなし。

と。「昔ありけん香の煙」と伝聞をもって語られる点からも故事として認める口吻が伺われ、諸注すべて、ここに「李夫人」を指摘する。

要するに反魂香によって大君にもう一度会いたいというのだが、このことをもう少し詳しく紹介すると、薫は心の中で、

心の中には、なほ飽かず過ぎたまひにし人の悲しさのみ忘るべき世なくおぼゆれば、

と大君がなくなったことを忘れる時もないので、

うたて、かく契り深くものしたまひける人の、などてかはさずがにうとくは過ぎにけん、と心得がたく思ひ出でらる。

と、あれほど宿縁深かった人がどうしてそのままになくなってしまったのだろうと思われる。そこで、

口惜しき品なりとも、かの御ありさまにすこしもおぼえたらむ人は、心もとまりなんかし。

と思う。どんな下層の人でも大君に似ている人なら心をひくだろうというのである。その上で香の煙がほしいという。この「口惜しき品」の人は、やがての浮舟の登場を暗示するとされる。

つまり右の経緯において、この宮との結婚を契機として大君を想

起し、なき大君に対してまず生きた形代を願い、ついで反魂を求めたことになる。

二の宮は結婚の相手として大君を代替する立場におかれている。もちろん代るべくもないのだが、立場上そうである。また浮舟は生きた代替物であり、魂は死せる代替物である。生者は人形といつてもいいし、すべては形代といつてよいだろう。反魂は、この〈代〉の中に登場が可能になった。

この〈代〉なる考えはきわめて日本的なものではないだろうか。先の木石が岩木になったように、いささかの変容をともないながら導入されたのが今の反魂香だと思われる。

しかしそれにしても、ここでも、

かく契り深くものしたまひける人の

と言われていることに、私は感じ入る。「李夫人」を引用する上述のくだりが、すべて「契り」と結ばれていたこと、また大君や八の宮という死者との間に生死の超越があることを考え併せると、又しても「李夫人」を契りによる生死の超越と捉えた源語作者の像が浮かんでくる。そうした因縁にあるゆえに、

魂之不来君心苦 魂之来兮君亦悲

という心理が武帝と薫とに共通することになり、また大君を李夫人に見立てることができるようになる。「総角」で重病の大君の枕頭に薫がよりそって看病したことも、「李夫人」の、

夫人病時不肯別、死後留得生前恩
と共通する構想である。

「宿木」では、こうして香に基づく李夫人との契りの深さを大君の上にスライドさせたが、また一方、絵に基づくスライドも行なっている。

中の君から浮舟のことを薫がきくくだりだが、薫は中の君に対して、

かの山里のわたりに、わざと寺などはなくとも、昔おぼゆる人形をも作り、絵にも描きとりて、行ひはべらむとなん思うたまへなりにたる

という。宇治の邸を寺などのようにして、大君の人形を作ったり絵にかいたりして供養をしようというのである。

ただ「李夫人」に人形は現われない。一方、絵をかくことも曼陀羅などがあるのだから一般的な事柄のように見えるが、この場合は大君の画像をかこうというのだから、やはり「李夫人」によって発想されたと考えの方がよいであろう。中国には王昭君の故事などもあり、肖像画をかかせるという発想は、中国的である。

そして全体の趨勢からいえば、大君への思慕を「李夫人」を通して行なおうとしている一部と見るべきであろう。だから、ここでいう人形は先の魂を具象によって代えたものでしかないし「契り」を現実の中に再現させようとするものにすぎない。

くり返していうと、大君との浅からぬ宿縁を自覚する中で死者が生死の境をこえて再現すべきだと考えた末に、魂の出会いを願ったのが「総角」や「宿木」の上述だったが、人形や絵も、その手段によって死者が再現すると信じたのであり、そう再現すべき宿縁があると考えていたのである。

ところが再現は、人形や絵などという廻りくどいものでなくて、もっと確実な形代として可能になる。「李夫人」によると、

死後留得生前恩 君愿不尽念未已

甘泉殿裏令写真

としても、ついに、

丹青写出竟何益 不言不笑愁殺人

ということになったから、源語の構想は、この上をいくものであった。

つまり中の君は、人形よりも、じかに似ている人がいるという。

「人は自分のことを大君の形見などというが、自分は違っていると思う。ところがその人はどうしてそれほど似ているのかと思うほどだ」というのである。

浮舟のことである。後文では「かの形代のことを言ひ出でたまへり」と、形代ということばで表現する。

こうして「李夫人」の絵にかくという故事は「宿木」のこの構想の中にとり入れられながら、その「丹青写出竟何益」をふまえるこ

とによって、より確かな形代としての浮舟の登場をうながすという筋を作り上げた。

「宿木」の中には人形や絵の空しさは直接語られていない。それでいて人形や絵をこえて形代を出すのだから、絵と形代としての人間との中間に「丹青写出竟何益」が隠されていることになる。浮舟出現の必然の説明役として、「李夫人」というプロンプターはきわめて有効であった。

四 李夫人―東屋

そもそも絵とても形代であり、次々と人間の形代を求めつつける宇治十帖の中で「李夫人」は大いばりで座るべき座を獲得することができる。だから「李夫人」の引用はなお続けられる。

中の君から消息を知らされた薫は、やがて浮舟を求めようになる。「東屋」の前半はまだ薫の気持が中の君にもあり、また浮舟にも関心をもち始めている段階だが、その途中、薫と中の君との会話の折にも、「李夫人」が引用される。薫の様子を見ながら、

あはれなる御心さまを、岩木ならねば、思ほし知る。

という中の君の心の説明の中である。これは「夕霧」の巻のそれと違って心を動かす方だから、直接、

人非木石皆有情

と対応し、諸注が引用をみとめるところである。

この場面でも薫は大君の人形を求める人物として登場する。すでにふれたことだが、

昔おぼゆる人形をも作り、絵にも描きとりて、行ひはべらむ

(宿木)

人形のついでに、いとあやしく、思ひ寄るまじき事をこそ思ひ出ではべれ

(同)

人形の願ひばかりには、などかは山里の本尊にも思ひはべらざらむ

(同)

と、もつばら浮舟を人形として話は発展してきたのだし、直前のごころでも中の君は浮舟に対して、

昔の人の御さまにあやしきまでおぼえたてまつりてぞあるや。

かの人形求めたまふ人に見せたてまつらばや

(東屋)

と思っているのだから、話は完全に死者を再生させる筋によって運ばれている。「李夫人」で絵にかくことと同じで、「宿木」の人形と絵と二つをもち出した中の一部が継承されたものといってもよい。

そこで今のくだりでも、大君のことを、

ただいにしへの忘れがたく

思っており、中の君もこの薫の心中を、

さしも、いかでか、世を経て心に離れずのみはあらむ。なほ浅からず言ひそめてし事の筋なれば、なごりなからじとにや、

と想像することとなる。大君のことがいつまでも心から離れないこ

とに改めて驚き、それも「浅からず言ひそめてし事」の筋遣だろうかと思う。このあたり「李夫人」の、

死後留得生前恩 君恩不尽念未已 ……

背燈隔帳不得語 安用暫来遠見逢 ……

此恨長在無銷期 生亦惑死亦惑

というのを地でゆくごとくである。また「李夫人」と不可分の関係にある「長恨歌」の末尾、

天長地久有時尽 此恨綿々無絕期

を思わせる。

そして、そんな薫の様子を見てみると、「あはれなる御心さまを、岩木ならねば、思ほし知る」ことになるという。

この引用は、全体の物語が裏側にひめた共鳴体を、きわめて心にくく、少々表に出してみたという印象がある。

そこで中の君はまた人形をもち出す。大君をこんなに慕う心を慰めるものとして、

かの人形のたまひ出でて、「いと忍びてこのわたりになん」と、

ほのめかしきこえたまふを、

と。

ただ、ここで複雑なのは中の君自身も形代として薫の中に存在すること、大君から中の君へという生命の移行の中に、もう一つ浮舟が登場してくることである。これは単純に死んだ李夫人(あるいは

は盛姫、楊貴妃)を絵や魂によって再現せしめたいという願望とは一致しない。三者が関係をもつからである。

しかしこれも、中の君を中間項とすれば、死者たる大君からの発信を最終的に浮舟へつなぐものとして納得できよう。やはり李夫人に当るものは大君という死者である。

その伏着が徐々についてゆくというべきであらうか。この段階ではまた中の君が形代であり、浮舟は人形にすぎない。

人形は「宿木」に最初に登場した時、いささかネガティブであった。そもそも人形は川に流してしまふものだからであらうし、これを作る工匠のこともあげつらわれた。また、人形の縁で薫は本尊ということばをもち出し、浮舟についての情報を知りたがった。

その「宿木」の会話をひいて、当の「東屋」の場面でも、浮舟の所在を知った後で、薫は、

いでや、その本尊、願ひ満てたまふべくはこそ尊からめ、時々心やましくは、なかなか山水も濁りぬべく、

という。まだそれほど借用していない様子である。

しかし、人形を本尊と叫ぶことは大事であらう。元来「ひとがた」とは人間の形として人間のコピーであり、そのゆえに水に流すことにもなる。今も中の君が薫の心を「御心をやむる袂をさせたまてまつらまほしく」思うというのも、人形を流して袂をするることによっていよう。

だが一方、「ひとがた」とは文字どおりその人の形であり、形見としてその人をしのばせるものだから「絵」ということばは、事実に近い内実をもっていたであらう。

いまの浮舟は、この後者のような内容をもっていたと思うが、しかし人形は雛として流されるものでもあった。

ところが本尊は違う。山水清浄の心境にみちびくものとして荘厳に輝くべきもので、人形の比ではない。

今の薫は半ば冗談のように人形と本尊を口にしながら、人形はやがて本尊に移行する。

中の君と浮舟との、大君の形代としてのあり方は、この移行の上で推移してゆくのであり、それほどのスケールの大きさにおいて源語の作者は死者と生者とをつないだのである。

この構想はひとり「李夫人」をこえていよう。「長恨歌」をふくめてもひとしい。むしろ大きな生命観——分身といってもよいしアルターイゴといってもよいが、その中で構想されたものだが、しかしその中で武帝や玄宗の悲しみを源語の作者が分身願望と捉えることは、ありえたであらう。武・玄の悲嘆のあの哀切さを、魂をよび絵での再現を願ったそれを、形代の觀念の中におくことは、大いにありえた。

「宇治十帖」の中に深々と「李夫人」が腰をおろす理由は、そこにあった。

五 李夫人—蜻蛉

「蜻蛉」の巻に入ると「李夫人」は三回にわたって引用され、その引用をおわる。その第一は浮舟の失踪におどろいた匂宮が、使の方を宇治に派遣するところである。

時方が宇治へ着いてみると家中が騒然としている。その中に向かつて事情を聞かせよと時方はいう。そして、

女の道にまどひたまふことは、他の朝廷にも古き例どもありけれど、まだ、かかることはこの世にあらじ、となん見たてまつる

と申し入れる。

この他の朝廷の例としてあげられるべきことが楊貴妃などの故事であることは、いうまでもないだろう。「河海抄」は、

楊貴妃帰唐帝思李夫人玄漢皇情順

といい、現代の古典大系補注や古典全集頭注もそれに言及する。ただここに明らかに引用を指摘する研究書は管見に入らない。川口久雄氏が、「源氏物語の表現における中国文学の投影」を論じたなかで、「和漢並列の形式」として中国の例をあげた他例とともに掲げるのが見られる程度である(六八三ページ)。

たしかに「女の道にまどひたまふこと」といえばあまりにも漠然としすぎていて、白氏文集の作品でいっても「長恨歌」も「李夫

人」もふくまれるであろう。「李夫人」の中にあげられた盛姫も女人人公の一人である。

だが、「女の道にまどふ」と、事を嬖惑と指定するかぎりにおいて、その指さすところは「李夫人」にある。額面どおりに受け取れば「長恨歌」は事件を感傷する詩であり、「まどひ」として「嬖惑に鑑みる」詩が「李夫人」だったのだから。その上、宇治十帖を中心とする末尾を「李夫人」によって彩ろうとする傾向は、上述のように濃いのである。

ただ、この引用は以上のものと大層異質である。詩句の口誦でもなければ引用でもない。実は漢籍の引用において、源氏物語はそれほど任意の引き方をするのではない。白氏文集について縷々述べてきたものからも知られるように、それぞれの詩の内で限られた詩句がくり返し引用されることが多い。たとえば「李夫人」でも三十五句中「甘泉殿裏令写真」「反魂香降夫人魂」「人非木石皆有情」の三句が七回にわたって引かれるのである。上にあげた他句は、これに関連するものにはすぎない。

これはまるで一編の詩のキーワードを見る思いがして興味深い。キーによって開かれる詩を知るといのが「引用」なるものだとはいふ本質がこんなところに存外に秘められているのだが、そうだとすれば、今の引用はむしろ「引用」とはいえない。

しかし、それでは単に故事をあげたのかというとうと、「他の朝廷に

も古き例どもありけれど」だけではなく、「女の道にまどひたまふ」と断定しているのだから、やはり「李夫人」の「嬖惑に鑑みるなり」を用いたというべきだろう。つまり白詩の諷諭を用いたのである。

私が今まで論じてきた白詩は諷諭詩だったけれども、明らかに諷諭を採用することは少なかった。だから一見して中国文学の諷諭精神が日本に受容されなかったといった誤解も生じたほどである。

しかし違う。詩句を引用するという手段で諷諭を生かすのが通常の方法であった。

そこで今の一節は、これらと異質に、諷諭そのものに言及するものであることが、吟味されるべきであろう。

一体に、宇治十帖で今まで「李夫人」を引用しつつ語ってきたのは、薫についてであった。それは以下に述べる二か所についても変わらない。ところがこれと異質な諷諭の採用で、それが匂宮についてであることは、はっきりと作者における使いわけがあったことを示しているよう。

しかもこのところいささかの不調和を感じるのは私だけであろうか。とりこんだ情況の中で女の道に惑うとは何をいいたいのか。それを、時方が見る主人の心境としても、落ち着かない。どれほどにか心配しているのだとでもいふべきところであろう。

これはきわめて観念的ではないか。匂宮の心境というより、第三

者の発声のようにきこえる。

こうした説明の介入を、おそらく薫についての語り口は許さないだろう。匂宮という役廻りが許してしまう倍音のように思えまいか。

倍音は倍音として大事ではあろう。作者が一方に冷やかに匂宮を見ている目をそこに感じると、いかにも男たちの行動は滑稽に見えるし、事実部分を捨象して全体に立ち戻ると諷諭の倍音は全体を統率するかの感があるが、しかしそれが源氏物語の部分部分を語る基音でないことは、明らかである。

私は、これを意図的なものと見る。薫における「李夫人」と匂宮における「李夫人」とを使い分けたにちがいない。いや薫の基音の途中に諷諭の倍音を挿入することが、有効だと判断したにちがいない。

これに対して薫を軸とする個所二か所では具体的な詩句の引用がある。おもしろいのは、浮舟を失った匂宮が「修法、読経、祭、祓と道々に騒ぐ」のが浮舟を失った「御心地のあやまりにこそはありけれ」というくだりで、これはいかにも「嬖惑」を地でいくものだろう。作者の意識の中で持続するものがあつたと思われるが、そうした前提をおいて薫の気持が語られるのである。

いささか自省的に、

まして、今は、とおぼゆるには、心をのどめん方なくもあるかな。さるは、をこなり、かからじ」と思ひ忍ぶれど、さまざま

に思ひ乱れて、「人木石にあらざればみな情あり」と、うち誦じて臥したまへり。

このような、とつおいつの思案こそが木石でない証拠であろう。もう浮舟は死んだと思っている。それでいて思い忘れることができない。それは、

縦令妍姿艶質化為土 此恨長在無銷期

生亦感死亦感 尤物惑人忘不得

と同じ情況であり、そのゆえに、右につづく「人非木石皆有情」が口ずさまれるに到ったのであろう。

とくにこのところは匂宮の浮舟への執着ぶりが語られ、匂宮との対比において自らのことも考えようとしているし、匂宮のことを「いみじくも思したりつるかな」と皮肉めいて見ているから、「をこなり、かからじ」ともいうのであろう。

すると「李夫人」ももう一步をすすめて、

不如不遇傾城色

までも薫の気持の中にとり入れられていたのではないかと思われる。考えてみれば、浮舟は薫をいわば裏切った形になっている。それが匂宮のたばかりであったにしても、浮舟は匂宮に身をまかせ、やがて薫の知るところとなる。そのことは、やや形をかえて薫自身の出生につらなるものであった。そうした人間関係をもし薫がこの時感じていたとしたら、そうした過去への回想もあつたろう。

これらもろもろの男女関係の中で「をこなり、かからじ」という科白が発せられたであらうか。

そうなると、従前の薫についての引用の中で、これはもつとも「髮惑」に近い。大君からの糸によって辿りついた浮舟もまた死の世界に入り、その死者にかかわって木石にあらざると口ずさんだ時にはじめて諷論が生きてくるといふ構造であらうか。なかなか問到な心くばりである。

しかし、もう一つ「李夫人」は「蜻蛉」に引かれている。いささか話題が交って薫の正妻二の宮をめぐるくだりだが、暑い夏の一日、薫が二の宮に着物をきせる。

手づから着せたてまつりたまふ。御袴も昨日の同じ紅なり。御髪が多さ、裾などは劣りたまはねど、なほさまさまなるにや、似るべくもあらず。氷召して、人々に割らせたまふ。取りて一つ奉りなどしたまふ心の中もをかし。絵に描きて恋しき人見る人はなくやはありける、ましてこれは、慰めむに似げなからぬ御ほどぞかし、と思へど

実は薫はせっかく二の宮の降嫁をうけながら、異母姉の一の宮に心ひかれている。それも「ひとふし違へそめて、さまさまなるもの思ふ人とな」った——大君に恋して以来物を思ふ人間になったと自覚することだが、さてこの日も前日に一の宮の姿を見、それとそっくりの着物を二の宮に着せてみたいと思ったのである。袴も一の宮

と同じ紅の生絹をつけさせる。

しかし髪は豊かさや下りぐあいは劣らないものの、似ても似つかない。氷をとりよせて二の宮に与えたというのも所在なさであるか。そこで思うことは、恋しい人を絵にかいて見た人だっただけのこと。しかし今の場合はあまりにも似ていない、と思う。

同じ着物をきせるということや当時の考え方からいえば、ただ装束を同じにするということ以上に重い意味があるだろう。一の宮の「うつし」を作ろうとでもするのだから、これは魂を移すことにもなるか。一の宮の着物をきるわけではないから距離があるが、単に嗜好を同じにするというだけではない。

そこに反魂香を作るのと似た気持もある。しかし今は同じ姿をさせることから絵をかいてしのぶことを連想し、そうしてしのんだ人もいたといつて「李夫人」の故事を引合に出すのである。

そして、そう引合に出すことによつて、李夫人を慕った武帝とひとしい気持を薫に託すことになる。一の宮思慕はそれほどだと読者は知らされることになる。「李夫人」の引用はそれを狙ったものである。

しかし、それにしては、従前からの大君思慕との関係を確認しておかなければならないだろう。実は薫にはすべてに先だつて一の宮思慕がある。これは早く「椎本」で八の宮の娘たちを垣間見る段階から現われ、たとえば中の君を最初に見た時も、

女一の宮もかうざまにぞおはすべきと、ほの見たてまつりしも
思ひくらべられて、うち嘆かる。
(椎本)

とあり、二の宮との縁組が進む時も、

后腹におはせばしもとおほゆる心の中ぞ、おほけなかりける。

(同)

という。二の宮でなくて、一の宮だつたらとおおけなくも思ったのである。

その点からいえば、大君とて一の宮の影に登場した女性であった。しかし大君が舞台の主役をつとめて死をもつて退場していったことも事実である。そして死後も薫の心の中に中の君という形代、「人形」としての浮舟を浮かび上らせる原動力となつていふことも上述のとおりである。

ところがそのもう一つ基層にいる一の宮は、舞台の主役をつとめない。心理的に首座を占めつつけながら主役をつとめないという役の分担がある。

現実の舞台劇の中で、主人公が心に抱いたもう一つの心理劇があるという分析は、息をのむほどに深いものをもつであろう。そのとおりだといわざるをえないが、さて舞台では常に大君が陰の演出者でありつづける。

二の宮降嫁の折もそうで、

いかにぞ、故君にいとよく似たたまへらん時に、うれしからむか

し」と思ひ寄らるるは、さすがにもて離るまじき心なめりかし。
(宿木)

とある。なき大君と似ていたらうれしいと思ひ、そのことで二の宮への関心もわくというほどであった。

だから二の宮との結婚は大君思慕と併行して進行する。右は夏のころのことだが、その秋に行なわれたのが、宇治に人形を作り絵にかきたいという、上でとり上げた申し出であり、さらに年をこえた翌年春、薫が二の宮を自邸に引きとろうとする時も、次のようであった。

かくて後(のち)は、忍び忍びに参りたまふ。心の中(なか)には、なほ忘れがたきいにしへさまのみおぼえて、昼は里に起き臥しながら暮らして、暮るれば心より外(ほか)に急ぎ参りたまふをも、ならはぬ心地にいとものうく苦しくて、まかでさせたてまつらむとぞ思ひおきてける。
(宿木)

要するに薫は大君が忘れられない。その思慕の中に一日中邸でほんやりとすごし、夜になってから二の宮のところへ行くものだから、いっそのこと自邸へひきとろうというのである。けっして二の宮は一人立ちしていない。

その結果、二の宮は晩春三月の末に薫の邸にひきとられる。その輿入れはまことに華やかな盛儀であったし、やって来た二の宮もけっして欠けるところはなかったのだが、やはり薫は大君のことが忘

れられない。

過ぎにし方の忘れればこそはあらめ、なほ紛るるをりなく、ものみ恋しくおぼゆれば、
(宿木)

そこで懸案の寺を宇治に建てる計画をすすめる。新妻の輿入れと故人のための造寺という、あい反する出来事が皮肉に平行して行なわれるのも、二の宮が大君を離れて存在しえない薫の心理においてである。

薫が浮舟とはじめて会うのは、この後の夏のことだが、そこでも浮舟は大君をすかして観察されており、

これを見るにつけて、ただそれと思ひ出でらるるに、例の、涙落ちぬ。
(宿木)

というし、浮舟を宇治にともなつた時などは、

おはし着きて、あはれ亡き魂や宿りて見たまふらん、誰によりてかくすずろにまどひ歩くものにもあらなくに、と思ひつづけてたまひて、
(東屋)

と大君の魂を見る思いまでする。この大君のゆえにこそ「すずろにまどひ歩く」という表現は、全体を暗示することばといつてよいだろう。

このように、あげつづけければきりもないほどの大君の影が浮舟にも二の宮にも蔽っているのであり、その内の一つが、いまとり上げている生絹の衣を着せる時だと考えるべきであろう。

今はすでに浮舟も姿を消し、大君の「人形」はいない。薫の目の前には二の宮しかないから、薫は二の宮を通して大君や、さらに奥の一の宮を思慕することになる。今も一の宮を透視しながら「ひとふし違へそめて」と大君への心の囚われを口にするのは、こうした薫の心の構造を示すものであろう。比喩的にいえば、生絹から透けてくる肉体は大君を幻視させるものだったかもしれないのである。こうした、女たちをめぐる薫の心境がしみじみと語られるのは、今の段のすぐ後である。

薫は一の宮から二の宮に来た手紙を見て心ときめかす。しかし「さやうなるつゆばかりの気色にても漏」らすわけにはいかない女性が一の宮である。

そして述懐によると大君さえ生きていれば他の誰も愛さなかったし、二の宮の降嫁も受けなかったという。また中の君、浮舟という二人への恋が悔まれるというのは、やはり大君を求めるあまりの恋人だったことへの自省であらう。

こうして語られたことがすべてであらう。あくまでも一の宮は深層の原点であり、表面上は大君を原点として薫の人生が仕組まれたということになる。

こうした大君を「わが心乱りたまひける橋姫かな」という。ふしぎのものと思える宇治の橋姫が大君であった。

それではなぜ大君は橋姫として心を乱したのだろう。反対に、た

だ神秘の美に据えられたのが一の宮であったのに。

それへの答えを、私は「蜻蛉」の巻の結語に見出す。薫は平生を回想して、

何ごとにつけても、ただかのつゆかりをぞ思ひ出でたまひける。

と八の宮一族のことを思い出すが、それは、

あやしうつらかりける契りどもをつくづくと思ひつづけながめたまふ

ことになる。そこに蜻蛉を見出して、

ありと見て手にはとられず見ればまたゆくへもしらず消えしかばるふ

と歌うのは、わがすぎこしの暗示をそこに見出したからであらう。

そこに私は二つのことを見つける。一つはここでもまたしても「契り」ということだ。「契り」として八の宮の娘たちのことを考えることは、右にもあげた二の宮を自邸に迎えた時にも、大君を思い出しては、

仏になりてこそは、あやしくつらかりける契りのほどを、何の轡とあきらめて思ひはなれぬ、と思ひつつ、寺のいそぎにのみ心をば入れたまへり。

(宿木)

とあった。それとそっくり同じことばを今くり返すのである。

「契り」は「蜻蛉」の中でもくり返される。浮舟失踪を知った薫が

右近から事情をきいた時も、

いかなる契りにて、この父親ちちの御もとに來そめけむ。

という。八の宮にひかれたのも「契り」によってであり、その「契り」のゆえに大君を恋し、その形代を求めることも、前世からの宿縁のように思ったのである。この人間関係に、薫は目に見えないふしぎを感じていた。

具体的には薫は大君との間に契りをもっていない。いないにもかかわらず大君との間に宿縁を感じ、それがあやしくつらからうとも逃れがたいと考えざるをえなかった。

この「契り」を思うことの有無が大君と一の宮とを距てているということができないのではないか。一の宮はもっと特別なところにあるのに対して、大君はより世俗の中にあつて、現実的なしがらみの中で体をしぼるものとして存在するように思われる。

そして、この「契り」が「李夫人」を引く時の源氏物語に、しばしば登場することは上に見て來たとおりである。換言すれば、「契り」とすらいえるように強い因縁を死者との間にもつ時に、反魂香を焚き、靈魂の帰還を求める行為がうまれたという説解が源語の作者にあるといった。

そのことは、薫と大君との上にも強く意識されているように思える。そもそも「宇治十帖」は前編にもまして「形代」「人形」を登場させる「うつし」の思惟の中で運ばれている。「うつし」は強く

宿縁によつてもたらされるものである。

そこに「李夫人」を下敷とすることの有効性があつたらう。すでに述べたように「李夫人」の引用は「夕霧」以下に八回の多きを数え、これは白氏文集の引用中もっとも多い。それほど多くをちりばめた必然性は、宿縁における反魂にあつた。

しかし、それにしても、こう大量に「李夫人」をひいて末尾十帖をつづつたとすると、「李夫人」の発言は反魂にとどまらない。

すなわち「嬖惑」の諷諭を無視するわけにはいかない。

たしかに「蜻蛉」の末尾の薫の述懐は、それに近いものを感じているようである。また先立っても「をこなり」と自省する中にそれがみられる。源氏物語の最後の主張が愛の否定にあるというのが私の考えだが（上掲拙稿）、それは「李夫人」の引用によつてもいうことができよう。

不如不遇傾城色

という「李夫人」の結句の「傾城色」を八の宮一族、また大君の契りとおきかえると、それはさながらに薫の述懐ではないか。

さらにそれを一般化した男女の愛を、この詩の読後に人々は想像しなかつたらうか。この詩が有名であれば、おびただしく引かれた「李夫人」の結論から、読者は果たしてどれほどに自由だったろうか。

とくに当時は、たとえば源信の『往生要集』など、仏教からの愛

の否定があった。蕪に仏心を認める説も多い。「李夫人」に仏教色はないが、指さすところはひとしい。

六 陵園妾—手習

白氏文集が「李夫人」につづけて載せる諷諭詩は「陵園妾」という。天子の墳墓をかこむ陵園に幽閉されて生涯をおくる美女の身上を叙べたもので、「託幽閉喩被讒遣黜也」という諷諭の趣が添えられている。ただ、これは汪立名編の『白香山詩集』には「憐幽閉」とあり、異同を見る。単に幽閉のみを旨としたものか、それを一端として讒言による黜を諷刺したものかの違いである。汪氏本の方が元であろうか。

さてこの詩が引用されるのは「手習」の巻である。先立って宇治川に入水しようとして失神した浮舟は、横川の僧都に助けられて、妹尼のいる小野の里に預けられた。その春から季節がめぐった秋の一日、すっかり健康を回復した浮舟のもとを僧都が訪れる。

そこで僧都は何かと語って浮舟を勇気づけた。そのくだりの最後が次のように語られる。

かかる林の中に行ひ勤めたまはん身は、何ごとかは恨めしくも
恥づかしくも思すべき。このあらん命は、葉の薄きが如し」と
言ひ知らせて、「松門まつかどに暁到りて月徘徊ついです」と、法師なれど、
いとよよししく恥づかしげなるさまにてのたまふことどもを、

思ふやうにも言ひ聞かせたまふかな、と聞きあたり。
この僧都の口吟は「陵園妾」の一節である。

松門到暁月徘徊

のように。白詩の一句であることは間違いないだろう。古来ほとんどすべての注釈書が引用を認めてきた。

のみならず、科白の最後のところ、「このあらん命は、葉の薄きが如し」ということばも、

顔色如花命如葉 命如葉薄將奈何

を翻案したものと見られるし、実は右に引いた源語の部分は、ひきついで、

今日は、ひねもすに吹く風の音もいと心細きに、おはしたる人も「あはれ山伏は、かかる日にぞ音ねは泣かるなるかし」と言ふを聞きて

と語られ、この冒頭のところが、また口吟につづく部分、

柏城尽日風蕭瑟

を承けたものと見られるから、むしろ明らかに文集を滲みこませようとしたかのごとくである。口吟の効果を盛り立ててもするかのうちに、両側から挿みこんで文集の詩句を象徴したとも見える。

たしかに、この部分には暗合するものが多い。「陵園妾」は今や陵園に閉じこめられて、

青糸髮落叢鬢疎 紅玉膚銷繫補綴

とあるが、浮舟もこの時はすでに剃髪している。先立って「いたうわづらひしけにや、髪もすこし落ち細りたる心地すれど」ともあり、やがて「かかる御容貌やつしたま」うこととなった。

服装にしても僧都が「御法服あたらしくしたまへ」といって綾などをさし上げたというから、ここにも変化がある。

また「陵園妾」は、

憶昔宮中被妬猜 因讒得罪配陵来

というが、浮舟にも浮舟なりに薫と匂宮との間での苦しみがあつた。匂宮から薫の匂いについて猜疑を向けられたこともあり、薫は匂宮との関係を腹帯から知るといふ苦惱も味わい、それはそのまま浮舟のつらさでもあつた。場合は違うにしても、世俗の人情の中の苦しみはひとしかった。

しかし、これらは些細な共通点にすぎない。このような点だけだったら、源語の作者たるもの、文集を引かなかつたであろう。そもそも「法師なれど、…思ふやうにも言ひ聞かせたまふかな」という無理までさせて、ここに「陵園妾」を織り込むについては、それなりの大きな意義がなければならぬ。

それと関係する事柄として、ここに「陵園妾」を引いて、なぜ「上陽白髮人」を引かなかつたかという問題がある。「上陽白髮人」はすでに見たごとく上陽宮に余生を送る宮女の境遇がよく似ているから、それでもよかつたかの如くだが、実はそうではない。

「陵園妾」でなければならぬ理由は、舞台が陵園である点にある。ここに「ひねもすに吹く風の音もいと心細き」ことはすでにふれたが、別の描写によると、

かの夕霧の御息所のおはせし山里よりはいますこし入りて、山に片かけたる家なれば、松蔭しげく、風の音もいと心細きに、つれづれに行ひをのみしつ、いつともなくしめやかなり。尼君ぞ、月など明き夜は、琴など弾きたまふ。(手習)

ともあり、閑寂ではあつても世俗を離れた別天地である。宇治にくらべると「水の音もなごやかなり」というのも、荒々しく運命が翻弄された宇治の水音を距てるものとして言及されているように見える。

その中で出家するとなると、もう全く世俗を断つた世界であり、常の世に生ひ出でて、世間の榮華に願ひまつはるる限りなん、ところせく棄てがたく、我も人も思すべかめる。(手習)

という世界と別の世界である。その中に浮舟は、

未死此身不令出
の如き覚悟でいる。おそらく、

聞蟬聴燕感光陰 眼看菊蕊重陽淚
手把梨花寒食心 把花掩淚無人見

といった境遇に近いものがある。

違ひといえは浮舟が強制されたものではないことだが、自分自身

の中には、強制とひとしい断念がある。何よりも浮舟はすでに出家という一つの擬似死をとげた。周囲はその死を収める墓域に似ている。

この比喩は、別の表現をもつても説明することができる。実は「手習」の巻のふくむ時期は「蜻蛉」と重なる。「浮舟」の巻をおえた源氏物語が語り出す場面は二つあり、浮舟失踪の後をうけてあわてる薫と匂宮との世界が「蜻蛉」に書かれ、一方世間から消息を断つた浮舟の小野の山里での生活は「手習」に書かれるという具合である。

世間では浮舟の、遺骸のない葬儀が行なわれ、すべての人々が死んだと思っている。四十九日の法事もいとなまれる。薫の行動でいえば、もう「蜻蛉」の巻で生涯を終ったかのごとく、浮舟をふくめた女性たちへの回想がある。匂宮にはまた新たな懸想人ができている。すべて「蜻蛉」の記述である。

一方、これらほぼ一年の歳月を浮舟は小野の山里にあつて仏道にこそしむ。おもしろいのは、ここに至るまで求婚者が登場することだが、もちろん拒否するところに主題がある。また、母の尼が得意そうに琴を弾くのも今の世俗から遠い。そもそもこの巻を「手習」というが、手習は憂悶の人のすることだという。

浮舟が憂悶の中で手習をしているところ、一方の六条院では薫が女房たちと戯れている。

「秋の盛り、紅葉のころを見ざらんこそ」など、若き人々は口惜しがりて、みな参り集ひたるころなり。
(蜻蛉)

と。手習の縁でいえば、薫のまわりで手習をしつつ、「かたへは几帳のあるにすべり隠れ、あるはうち背き」している。見わたした薫は即座に気をひく歌を書いてみる、といった具合である。

この明と暗、俗と聖といった両者の対立を併行させつつ語る源氏物語の手腕には驚嘆せざるをえないが、この構想こそ、小野の山里を世俗と隔離された、まるで冥界のごとき世界とすることを成功させた。

そして、この冥界の上に「陵園妾」のイメージをかぶせることは、ぜひとも必要なことだったし、読者も容易に納得したのであろう。いかにも小野の山里は「陵園」であり、恋のしがらみによって幽閉されてしまった女が浮舟であった。

それも自分が大君に似ているばかりのことであり、薫の懸想によつてである。薫のそれがなければ匂宮の拉致も起こらなかったであろう。

ところが薫も匂宮も今は別の世界にいる。浮舟を気にしているとはいえ、急に一の宮が表に出て来たりする。こうした華やきは、陵園に妾を送りこみながら、あい変らず続いている宮中の歓楽と何ら変らないであろう。「憐幽閉也」という諷諭は、あざやかに生きている。

七 井底引銀瓶―若菜上

朱雀院が出家の志をとげるについで、もつとも気がかりなのは女三の宮の結婚であつた。病の床にありながら、あれこれと思案もし、人にも語つてみる。女三の宮は以後の展開において大きな存在だから、この結婚の決定は重大な話題である。

その中で院の気持は光源氏への降嫁に傾いてゆく。しかし、今まで独身を通し、皇女でなければ結婚しないといつてゐる柏木も、有力候補として推薦されている。他に女宮はいるのに、なぜか女三の宮の結婚に話をしぼつていく演出は、もちろん後々の事件の伏線であるにちがいない。

この伏線の中で朱雀院はあれこれと娘の結婚のことを苦慮するのだが、そのいうところをきくと、前半は親ないしは後見を失つた後にたどる女の悲劇を、心配してゐるらしい。

さるべき人に立ち後れて、頼む蔭どもに別れぬる後……

後の世に衰へある時も

と。だからこの婿選びは、例の雨夜の品定めや「議婚」と違つて、わが死後に重点のおかれた思案だつたことがわかる。

そして、この「その後」においても許されるとする場合は、

さるべき人の心にゆるしおきたるままにて世の中を過ぐすは、宿世宿世にて、後の世に衰へある時も、みづからの過ちにはな

らず。

という。「さるべき人」とは親族とか後見の者とかをいうのである。その者の意見に従う場合は、悪くなつてもそれは宿世で当人の欠陥ではない、というのである。

したがつて、その反対が自分の意志で結婚した時のこととなる。すなわち次の場合である。

親に知られず、さるべき人もゆるさぬに、心づからの忍びわざし出でたるなん、女の身にはますことなき疵とおほゆるわざなる。なほなほほしきただ人の伸らひにてだに、あはつけく心づきなきことなり。

許可なく忍びわざをした結婚は女の最大の疵であり、臣下といえどもそうだという。

そうあえて発言する理由は、朱雀院が親だからではあるまい。臣下のただ人だつてそうだと、わざわざつけ加えているのは倫理を一般化しようとしているのだから、強い信念によつて言うのであろう。

しかもそこへつけ加えて、女三の宮が「あやしくものはかなき心ざまに」見え、「これかれの心にまかせてもてなしきこゆる」状態だというのは、女三の宮への危惧としても、この信念が有効だつたことを物語つていよう。

これは、物語の後々、この女君が迎る運命を知つてゐる読者にとつては、全く意図的な伏線としか映らないであろう。

作者はどんな意図による伏線を敷くのであろうか。

その答えが白氏文集の中にあるように思われる。巻四に載せる諷諭詩「井底に銀瓶を引く」は銀瓶を井底から引き上げようとしていて繩が切れたり、玉の簪を石で磨いていて途中で折れてしまうことを夫との離別とひとしいとし、その理由が許可のない結婚にあったと語る詩である。

路上に目を交して結婚したが、婚家では、

到君家舍五六年 君家大人類有言

聘則為妻奔是妾 不堪主祀奉蘋蘩

という。手続を踏んだ嫁でなければ一家の祭祀には加われないというのである。「奔是妾」とは「心づからの忍びわざし出でたる」妻である。この点において、朱雀院の考えは「井底引銀瓶」とひとしいであろう。銀瓶、玉簪という高価なものを比喩とすることにおいても、皇女などがあたり身を誤ることに通じるものがある。

この朱雀院の思惑と詩について、つとに開わりを見つけたのはやはり『河海抄』であったが、『河海抄』は並べて『孟子』もあげる。不待父母之命、媒妁之言、鑽穴隙相窺、踰牆相從、則父母國人皆賤之。

(滕文公篇)

これは源語や白詩の思想の、より十分な説明として顧られるべきものであろう。源語はこれを基とする白詩を顧慮しながら、朱雀院の発言をつづつたと思われる。

すると白詩の諷諭もいっしょに抱え込むこととなる。

寄言癡小人家女 慎勿將身輕許人

が詩の末尾であり、

止淫奔也

が諷諭である。

出家を前にして病床にあつた父の意志はここにあり、それを女三の宮に對して危ぶんでいたのだが、女三の宮が心ならずも類似の運命を辿って剃髪に追い込まれ、相手の男がほとんど殺されるといつてよい死に方をするのは、誰もが知るとおりである。

作者の人生への目は鋭い。だからこの段の直後に、当の男がこの時から皇女に熱心に求婚していたと書き加えるのである。

八 古塚狐―手習

宇治川に入水しようとした浮舟は、氣を失っているところを横川の僧都一行に助けられる。

そのくだりはきわめて熱心に語られるが、この熱心さは、発見したものが妖怪変化の物であり、徐々に人間へと形をととのえていく過程にこめられている。

浮舟をめぐる死と再生にとつて、これは必要な手続きであつたらう。浮舟が、ただ入水に失敗して宇治から小野へ運ばれたのでは、現実の舞台を移動したにすぎない。浮舟の擬似死にとつて、妖怪と

なることは必要な通過儀礼であった。

だからこの手続は、手がこんでいる。まず、

森かと思ゆる木の下を、うとましげのわたりや、と見入れたるに、白き物のひろごりたるぞ見ゆる。「かれは何ぞ」と、立ちとまりて、灯を明くなして見れば、もののみたる姿なり。「狐の変化したる。憎し。見あらはさむ」とて、一人はいますこし歩みよる。

(手習)

といった具合で、何物か「もの」は狐が化けたものだと考えられた。僧都までも、

狐の人に變化するとは昔より聞けど、まだ見ぬものなり

とわざわざ出てくるとは、読者のユーモアをささうものか。そして浮舟を見て、僧都は僧と、

「これは人なり」……

「たとひ、まことに人なりとも、狐木霊やうの物の、あざむきて取りもて来たるにこそはべらめ」

と会話を交す。宿守をよぶと、

狐の仕うまつるなり。……狐は、さこそ人をおびやかせど、

事にもあらぬ奴

という。そして僧が浮舟をせめるさまは、けっして人間として扱ってはいない。

鬼か、神か、狐か、木霊か。……名のりたまへ。

いで、あなさがなの木霊の鬼や。まさに隠れなんや。

その上「目も鼻もなかりけん女鬼にやあらむ」と衣をひき脱がせようとする。やつと僧都のはからいで「たとえ変化の物であろうとも可哀想だ」ということになって屋内へ連れこむこととなった。

これだけ「変化」の物として扱えば十分であろう。読者はやがてこれを浮舟だと知っても、浮舟が十分に変化の物と見なされるほどに変わりうるのだということを、実感するはずである。多少熱心すぎる右のような叙述は、女が狐とも見られること、狐が女に化けることを感覚的に訴えようとするものだったと思われる。

そうした騒動もやつと一段落する時とて、

身にもし疵などやあらん、とて見れど、ここはと見ゆるところなくうつくしければ、あさましくかなしく、まことに、人の心まどはさむとて出で来たる飯の物にや、と疑ふ。

といった具合であった。疵をしらべるなど、全く人間としては扱っていないし、先の「衣ひき腕がせんとすれば」がいかに荒々しかったかを証明しよう。

さて、この部分に対して、いくつかの書物が白詩「古塚狐」を指摘してきた。水野氏(二三五ページ)、古沢氏(六ページ・三五ページ)、丸山氏(二〇六ページ)、小守氏(七八ページ・九五ページ)らがそれである。ただ、代表的な近代の注釈書には、指摘がない。

「古塚狐」は古い塚に住む狐が美人に化けて人を迷わすという詩で、

忽然一笑千萬態 見者十人八九迷

仮色迷人猶若眞 眞色迷人應過此

という句をもつ。そこに「人の心まどはさむとて出で来たる仮の物」を参照して、引用が指摘されてきたのである。

引用に言及しない書物があるのは、源語の中に狐のことがなく、ただ「仮の物」とあって、白詩の中では「仮色」と述べられるところに、距離を感じたゆえであろうか。

しかし源語における周到な準備はすでに見たとおりで、右の源語の部分は、その結論ともいえるものである。また「仮色」というのは「人の心をまどはすものを「色」として表現したものだから、全体として両者の間は近いと思われる。

しかもこの狐は明らかに正体不明の変化の物の一つとして用いられたもので、源語に多い他の狐とは異質である。たとえば荒れはてた末摘花の邸を述べた、

もとより荒れたりし宮の内、いとど狐の住み処となりて、うと
ましうけ遠き木立に、泉の声を朝夕に耳馴らしつつ

(蓬生)

は、すでに「凶宅」との関係であげたところで、そこでも惟光のことを、

狩衣姿なる男、忍びやかに、もてなしなごやかなれば、見なら
はずなりにける目にて、もし狐などの変化にやとおぼゆれど

(同)

として変化に言及するが、それほど本物か化物かを中心に据えて論議するものではない。邸の荒廃を強調する点景として狐をあげるもので、まさに「凶宅」のたぐいである。

また「夕顔」の中にも「凶宅」と共通する狐が見えることもすでにふれたが、そのほかにも、

げに、いづれか狐なるらんな、ただはかられたまへかし

という源氏のことばがある。夕顔に向かって化かされていよというのだから、これまた他愛ない愛の科白にすぎない。以上のものにも「古塚狐」の引用を認める説もあるのだが、私には異質と思える。

「手習」の当該箇所はこれらとは別に、狐を人心を迷わす仮の物として、真か仮かをめぐる伏線の末に叙述されたものと見るべきであり、それこそが「古塚狐」の主旨だったと考えられる。

そこで、もし「古塚狐」が「手習」に生きているとすると、この白詩が語る後半の内容は、実は狐を離れ、いつもながらの女性の問題となる。右にあげた部分からしてそうで、狐という仮りの物が本物のように人を惑わせるのだから、本物の女が人を惑わすのはそれ以上だといふのである。なぜなら、

彼眞此仮俱迷人 人心悪仮貴重眞

からである。そこで、

狐仮女妖害猶浅 一朝一夕迷人眼

のに対して、

女為狐媚害却深 日増月長溺人心

ということになる。狐のような女の媚のもたらす害は、長く人心を溺れしめる。

その例を褒姒、妲己に見ることができる。

褒姒之色善蛊惑 能喪人家覆人国

褒姒は周の幽王の寵姫であり、妲己は殷の紂王の寵姫である。いずれもそのゆえに王朝の終焉がおとずれた。

こうして白詩は結論をつづる。

君看為害淺深間 豈將仮色同真色

と。やはりこの詩は仮と真とをめぐる主張をもった一編であった。人間狐に化かされたとは気づきやすい。それでいて女に化かされることにはなかなか気づかない。実は、仮の狐より本物の女の方がはるかに害は大きい。それが白樂天のいいたいことであり、よって一詩は、

戒艶色也

という諷諭をもつこととなる。

「手習」のこの個所に白詩を垣間見てしまう読者は、いやでも艶色の戒を受け入れざるをえない。幽王と褒姒、紂王と妲己らの関係を、薫や匂宮また浮舟ら姉妹の上に重ねざるを得ない。白詩の引用を認めるとは、それ以外にない。

従来も文集の受容は当然なほどに言われてきた。紹介しつづけてきたごとくである。しかしその個々について、たとえば語句を借りたとか、情景設定に利用したとか、はたまた故事を参照したとかといわれてきた。

もしこうした理解が正しいとしたら、読者がもとの詩を知らない場合に限られると私は思う。そのことばの範囲で見事な描写や説明だと思っただけだろう。故事の場合も、事柄としてのみ受け取る場合である。

しかし、詩の一節なら、事柄だけが裸で出てくることはない。だから詩の一節を引用する限りにおいて、一節は全体の一部であり、全体を背負っている。読み手からいえば全体は思い出されてしまうのだし、書き手は、思い出すなどいっても無理な注文だということには心得ている。

それが詩の引用であり、それ以外に考えられないだろう。

その点において、源氏物語が諷諭詩を受容しながら諷諭を受容しなかったということはありえない。艶色の戒を、作者は第二の文脈として、読者に提示したのである。

もちろん艶色とは浮舟をこえて宇治十帖の女たちに拡がり、また男女の窓において男性もつつみこんでいくであろう。

浮舟でいえば二人の男の心を奪った点において戒められるべき艶色をもつが、彼女は大君からの分身をもちつづけ、男心に訴えかけ

る橋姫の姿すらうけついでいるかに思えるが、上述のように宇治の姫君たちへの思慕は、薫においては女一の宮という源があった。

さらに時代をさかのぼらせて全源氏物語における男女關係をいまよび返すべきだが、それはさし控えるとして、さし当っていえば、夕霧以下の男性たちの織りなした恋愛圖の中に、「李夫人」の疑惑、「陵園妾」の幽閉に到る宮中の人物關係、「井底引銀瓶」の淫奔そして「古塚狐」の艶色への批判が、もちこまれるべきであった。

とくに源氏物語末尾におけるこの集中は、看過できない。白氏の諷諭詩の引用は、この後同じ「手習」に上述の「陵園妾」の引用が一か所あり、白詩全体としては「夢浮橋」の末尾に「長恨歌」の引用がある。

このこと自体も引用が恣意的ではなかったことを示すもので、源氏物語という恋愛物語の、本当に語りたかったものが何かを、十分考えさせるであろう。

注

1 文中略称をもって引用した諸書は、次のごとくである。

(一)大系本 山岸徳平校注『源氏物語』(日本古典文学大系) 岩波書店 一九五八年—一九六三年

(二)古典全集本 阿部秋生・秋山虔・今井源衛校注・訳『源氏物語』(日本古典文学全集) 小学館 一九七〇年—一九七六年

(三)水野氏 水野平次著『白楽天と日本文学』(復刻版) 大学堂書

店 一九八二年

(四)古沢氏 古沢未知男著『漢詩文引用より見た源氏物語の研究』

桜楓社 一九六四年

(五)丸山氏 丸山キヨ子著『源氏物語と白氏文集』 東京女子大学学会 一九六四年

(六)小守氏 小守郁子著『源氏物語における史記と白氏文集』(同人発行) 一九八九年

(七)川口久雄氏 川口久雄著『三訂平安朝日本漢文学史の研究』 中 明治書院 一九八二年

2 文中引用した本文は、次のものによる。

(一)『源氏物語』 阿部秋生・秋山虔・今井源衛校注・訳『源氏物語』(日本古典文学全集) 小学館 一九七〇年—一九七六年

(二)『白氏文集』 『白氏長慶集 上下』(長沢規矩也編『和刻本漢詩集成』) 汲古書院 一九七四年

(三)『河海抄』 玉上琢弥編『紫明抄 河海抄』 角川書店 一九八七年